



靖国通りの誕生と街並変遷

元千代田区役所 景観・都市計画課職員/市井人・斎藤月岑に学ぶ会肝煎
小藤田 正夫様

紹介者 八木 壮一会員

江戸期、番町と小川町の節点に位置する飯田町への物流の経路は、日本橋から外濠（現在の日本橋川）を經由して、俎橋上流の俎河岸に至る舟運によるものが中心であった。神田祭礼の道筋も神田橋御門前から護持院原と武家地の間を通り、堀端に出て、俎橋を渡り、すぐ右に曲がり、飯田町のある中坂を上り、田安御門から、上覧所（現・乾門辺）に至るものであった。御城中心の世界にあっては、現在の神保町辺は東西の経路より雉子橋、一ツ橋御門につながる南北の経路が重要であった。

明治2年6月に東京鎮魂社（現・靖国神社）が建設されるに合わせるように、下町からの陸路が求められた。明治2年4月に、俎橋から現・神田神保町三丁目の中ほどの今川小路まで新道ができ、そこから神保小路（現・さくら通り、すずらん通り）をへて、小川町通り、須田町へ至る、東西の動線が確保された。この沿線に形成された明治生まれの商店街は、駿河台や錦町等の御屋敷町をつなぐ幹線として、現・中央通りと競うような賑わいのあるものと成長していた。

この通りの一本北側、現・専大前交差点の東南の角・南神保町8番地には、幕府の奥医師であった伊東玄朴が建てた三階建の屋敷があり、明治20年代の終わり頃には、メソヂスト教会の仮会堂（現・九段教会）として使われていた。ここを借りて、明治30年1月、原胤明（元町奉行所与力で、維新後キリスト教に改宗し、教戒師でもあった）は、「東京出獄人保護所」を開設した。ここは、以後1万3千人の出獄者を保護する先駆的な場所となった。神田と飯田町に挟まれた旧武家地は学校だけでなく、新しい宗教施設や慈善活動の発祥の地でもあった。

しかしながら、明治36年度の東京市区改正事業により、南神保町北側の通りは、幅員3〜4間から、12間（約22m、中央車馬道8間、歩道2間）の幹線道路として拡幅されることとなり、保護所の宅地は半分近く削られ、保護所は明治37年8月に元柳原町（現・神田岩本町）へ移転を余儀なくされた。

図は、拡幅後、商業地へ変わった南神保町（現・専大前交差点から神保町交差点）北側に古書店が集積していることを示している。ここは、その頃、地域に増えた古書業者の店舗開設の受皿となった。さらに大正期に入ると、路面電車が交差する現・靖国通りの南側の駿河台下まで、古書店が軒を連ねることとなる。震災後の区画整理で、道路はさらに幅員33mに拡幅され、戦災をまぬがれた大正通り南側の神保町古書店街は、今もこの頃の雰囲気を与えている。

私は、長い間、神保町の古書店街が北向きに店を構えていることは、意図的に作られてきたのかと考えていた。しかしながら、偶然が必然を生むかのように、神保町界限は、明治の幹線道路整備と地域産業の成長がコラボして生まれたものであった。

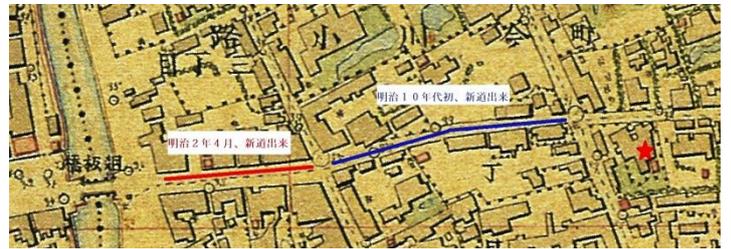


図1. 明治16年測量図、★印は原胤明が開設した東京出獄人保護所、東側に旧武家屋敷が連続している。



図2. 明治40年の測量図、図1と比べると市区改正道路が、俎橋の南側の位置に合わせて拡幅されたことが良く分かる。



図3. 明治36、7年頃の神田古本屋分布図、南神保町北側に集積している。

図4. 南神保町8番地にあった3階建の東京出獄人保護所の庭。被保護人と其子女、下から三段目に原胤明と家族。

